



港区コミュニティ情報ネット
 ここは港区の情報ポータルサイト。最新の耳より情報がいっぱいです！

検索するキーワードを入力

検索

[Kissポートからのお知らせ](#)

[今月のおススメ！](#)

[イベント情報・チケット情報](#)

[サークル情報](#)

[施設案内](#)

[港区探訪](#)

[ふれあいコラム](#)

[連載コラム](#)

[地域人](#)

[Kissポートギャラリー](#)

[文字サイズ](#)

[大きい](#)

[ふつう](#)

[小さい](#)

[HOME](#) > [港区探訪](#) > 港区探訪: 六本木タイムトラベル

港区探訪



[バックナンバー](#)

「六本木タイムトラベル」

六本木ヒルズの誕生で俄然注目を浴びる街「六本木」
 華やかな中心街を離れると、街の喧騒から逃れるように旧跡、名所が
 残されています。

そんな知られざる六本木の横顔を、みなさんと振り返ってみましょう。



六本木交差点から撮影した現在の
 六本木の様子です。文豪たちはこ
 こを歩きながら物語の構想を練っ
 ていたのでしょうか？



[▼六本木の由来](#)



[▼偏奇館](#)



[▼志賀直哉旧居跡](#)



[▼龍土軒](#)



[▼毛利庭園](#)



[▼ふち博物館](#)



[→地図はこちらです](#)

「六本木」と言えば、国際色豊かな夜の街を連想される方も多いのではないのでしょうか。新たな流行、情報の発信基地として、さまざまな表情を見せる「六本木」ですが、その昔は、現在の町並みからはまったく想像のつかない別の顔を持っていた。

「六本木」の街の起こりは、江戸時代の初め、徳川二代将軍 秀忠夫人の葬儀に功績のあったお坊さんたちがお寺を建て、門前町ができてからのようです。時代は流れ明治時代には陸軍が置かれました。戦後は軍隊の後に米軍が駐留し、街には米軍向けのお店が作られるようになりました。その後、「アメリカ」に惹かれて若者が集まるようになり、今の華やかな街「六本木」が形成されました。

六本木の由来

東京には、「七不思議」といわれる場所があちこちにあります。麻布にも、「麻布七不思議」といわれる場所がありました。七不思議とは言っても諸説あり、すべてを合わせると25、6不思議くらいあるそうです。その中に「六本木」に関する記述があります。「六本木」の由来は、読んで字のごとく六本の松が生えていたという説や、「木」にちなんだ上杉、朽木、高木、青木、片桐、一柳という苗字を持つ6つの大名屋敷があったからという説など、複数の説があるようですが、どの説が正しいかは定かではありません。 そんな六本木の旧跡、名所をご紹介します。

偏奇館（六本木一丁目）

耽美派文学のリーダー格として一時代を築いた永井荷風(1879年～1959年)が大正9年(1920年)から東京大空襲(1945年3月10日)で焼失するまでの25年間暮らした「偏奇館」がありました。「偏奇館」とは、ペンキ塗りの洋館からもじって命名されました。この場所で名作「墨東綺譚」などを執筆しましたが、今では近代的なビルが建ち並び、その谷間に碑だけがひっそりと残されています。



志賀直哉旧居跡（六本木四丁目）

「暗夜行路」などの代表作を世に残した志賀直哉が14歳から29歳までの青春時代を過ごしたお屋敷がありました。この志賀直哉旧居は雑木林に囲まれた中にあり、1682坪(5550.6m)という広大なお屋敷でした。ここを舞台として作られた作品に「剃刀」などがあります。



龍土軒（六本木七丁目）

明治33年(1900年)、この場所にフランス料理の草分け「龍土軒」が開業しました。ここでは、国木田独步、島崎藤村など自然主義作家を中心とした「龍土会」という集会在定期的に行われました。集会では朗読、談話の合間に外国文学が紹介され、自然主義作家を育てる礎になったと言われています。現在、「龍土軒」は移転し、この場所には掲示板のみが残されています。



毛利庭園(六本木六丁目)

江戸時代、この場所は長門長府藩毛利家麻布日ヶ窪上屋敷の一部でした。ここは、忠臣蔵でおなじみの赤穂浪士(岡島八十右衛門以下10名)が亡き主君の元へ旅立った場所であり、またかつての陸軍大将 乃木希典が生まれ育った場所でもあります。



ぷち博物館



在りし日の偏奇館の姿です。(昭和14年)



在りし日の龍土軒の姿です。



当時使用されていた龍土軒のパーティ用献立表です。

龍土軒に通われた方々の寄せ書きです。

このホームページはKissポート財団の公式ホームページです。このホームページのすべての権利は当財団に帰属します。当財団の許可なく複製、転載は出来ません。